

提出，全19日東京府知事松田道之を通じて内務卿伊藤博文に提出され，越えて13年1月17日付で向う30年の版權を許可された。そして一年後の明治14年1月26日『固齡草——名齒の養生譚』と改題して出版された。高山紀斎の「保齒新論」に先立つこと半年で，和文の類書の嚆矢というべきである。

書誌学的構成は，表紙兼扉—1，緒言—3，本文—75，奥付—1，広告—2，付図—2計84頁，46版（12.5×18.5cm）縦書，旧漢字（ルビ付き）旧平仮名交り文，紙表紙（淡青色）仮綴ち本である。

緒言の書き出しで道盛は，
『不佞 曩に

内務卿閣下の准允を蒙り爰に齒科醫業を開き爾來患者の来る必ず齒の養生を諮ふ 不佞素より淺學なれば敢て人の爲に養生法を告諭するの識なしと雖嘗て學ひたる所と又自ら経験したる所を以て齒の養生に係ることを譚話すと雖ども其の趣旨を審にする能はずして且遺漏の憾を免れず依って施術の餘暇齒の養生に係るべき者を記して以て其譚話に換へんと慾し名つけて齒牙養生譚と云う（まゝ，但し原文は縦書）……（中略）……』

と書き，『本書は齒の發生から始めて，義齒の功用利害に終ろうとしたが，今回は齒の充填で擱筆して，義齒と遺漏（口蓋破裂）などは將來次の編で述べようと思う。……（後略）（現代文にアレンジ）』と述べている。しかしその後，続編は出ていない。

本書の本文には目次や見出し区分がなく，全体が一連の文章となっている。しかし，緒言は漢字平仮名（一部くずし字）交り文のまゝであるが，本文の漢字には平易な話し言葉の振り仮名がほとんど全部つけてある。例えば

夫人は一生の中に二種の齒を有つ者にして一種を乳齒と稱し一種を永続齒と稱す

我が齒科の醫術に於る齒列を矯正の術ありての如くである。

大凡の内容を順序に分けてみると，1. 齒の發生（萌出順序）2. それに伴う齒列不正，3. 乳齒齲蝕による健康障害，4. 永久齒の萌出，5. 齒牙の構造

および化学的成分，6. 齲蝕病因論，7. 酸產生説，8. 齒髓炎，9. 齒牙の栄養論，10. 母体，11. 齒牙の作用，12. 齒牙を保護するための注意，13. 砂糖の害，14. 齒口清掃の必要性，15. 齒石，16. 齒刷子，17. 齒磨剤についての注意，18. おはぐろ，19. 充填，20. 金箔充填・アマルガム充填——となる。

76・77頁の間に2頁大紙片に，1）乳齒左側の上下牙窩に根抵するの図，2）全，永続齒左側の図，3）下顎大齲蝕を縦割して中心を現した図，以上3図が印刷，綴込まれている。

奥付には，前述の版權免許，出版年月日，定価35銭，著述兼出版伊澤道盛とあり，発兌書林には島村利助，瑞穂屋卯三郎，丸屋善七，丸屋鉄次郎，山中市兵衛の5人が名を連ねている。

広告は「磨齒漱玉散」一上好罐入一器25銭箱入10銭，一尋常罐入一器10銭，箱入5銭，袋入2銭。

「右の磨齒散は専ら齒を健固にする所の方剤にして尋常の磨齒散の如き砂石の類にて製し齒を損害するにあらざれば用いて其効の虚しからざるを識り給ふべし。齒科医伊澤道盛 製」とあって，全国の取付店名51が列举されている。

以上につき原文および図を示して詳細に報告した。

10) 軍陣齒科学（第4報）

The Military Dentistry (4th Report)

日本大学松戸齒学部 ○落合 俊輔
吉井 秀鑄
谷津 三雄
滝口 久
新国 俊彦

Shunsuke Ochiai, Hidetoshi Yoshii, Mitsuo Yatsu, Hisashi Takiguchi, Toshihiko Niikuni, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

陸軍軍医大佐松本秀治が，昭和16年10月26日に国防医学講習会で行なった「軍陣齒学に就いて」の要旨によると，近代戦にあっては要塞戦，市街戦，又は塹壕戦の戦闘において，顔面頭部の戦傷

の比率が四肢其他の戦傷に比して増加する傾向にあると述べ、クリミア戦から満州事変までの頭部戦傷の占める割合を示し、日清戦役においては11.2%であったものが満州事変で22%を占め、未だ統計には表わされていないが、今事事変（支那事変）においても上海戦において顔面戦傷が非常に多数生じていると述べている。

頭部戦傷死と顔面戦傷死との比較を日本の諸戦役について行い、「頭部 5.7 に対し顔面 1.0 の比率であり、更にこれを戦傷のみについて見ると頭部戦傷と顔面戦傷の比率は 1.2 対 1.0 である。満州事変の一部の統計では顔面戦傷 553 名中口腔外科領域 208 名で、顔面戦傷の 1/3 強を占めている。したがって近代戦においては顎戦傷の比率が増加している点重要である」と報告している。

さらに顔面の軟部戦傷が骨部戦傷に対して 2 対 1 と高い割合を示すこと、また、骨部損傷部位としては、上顎骨 36.5%、下顎骨 35.1% の順であることなどを示し詳細に述べるとともに、戦時においては上顎骨と下顎骨の損傷の割合が 1.1 対 1.0 と大差のないことを示し、両者の間に大きな差のある平時との違いを述べている。

ついで「軍陣歯科学は顎戦傷すなわち口腔戦傷学と同義に解釈されるあるも、口腔戦傷学は軍陣歯科学の一部分とも見なすことができ、軍陣歯科学と同意義ではない」とし、「軍隊における歯科多発疾病の予防及び治療並びにこれが研究をなすとともに顎戦傷の治療並びに研究をなす学問であると定義し、「一般歯科学的知識を軍の特殊性に依じて適切有効に駆使するにある」とまとめている。

そして「顎戦傷特殊治療」として、下顎骨欠損に対する骨移植手術や顔面形成手術、顎骨骨折の特殊顎間副木と顎固定帯などの事例をあげるとともに、軟部移植手術の部位別の症例数や、下顎骨骨移植手術の成績などを示している。

このように、頭首戦傷から頭部・顔面戦傷、更に顎・口腔外科から顔面・顎・口腔外科へと変わって行った。そしてこのような貴重な経験が今日の形成外科や頭頸部外科へと発展したと考えられる。

ついで欧州における顔面・顎戦傷についてふれており、普仏戦の際、ランゲンベックが「顎の戦傷は外科医と歯科医の緊密なる提携なくしては完全を望みえず」と提唱したが入れられなかったこと。しかし、欧州大戦（第 1 次世界大戦）が勃発するに及び顎戦傷の多発と機能的治療の重要性が叫ばれ歯科学的専門知識がこの治療上に重要な要素であることが認識される様になり、顎外科専門の病院が実現され、外科学と歯科学すなわち外科医と歯科医の緊密なる共同手術の下に特殊な治療部門が創設され、実地に応用されるになり、顎、口腔外科から顔面・顎・口腔外科の発達を見るに至ったと強調している。

一方、わが国で軍陣歯科学なる名称を初めて使用したのは中原 実先生である。

「日本歯科大学 60 周年誌」によると、「1917 年（大正 6 年）末日の対独宣戦布告に際し、同病院における研究を中止して渡欧、フランス陸軍歯科医としてパリー・ヴァル・ド・グラス陸軍病院並びにヴィッシー第 45 戦時顎面中央病院に勤務、軍陣歯科学を研究」。大正 8 年 1 月第 1 次大戦終了と共に軍務を退いたが、研究は大正 12 年 1 月まで続けられた。大正 12 年 4 月、帰国、日本歯科大学専門学校教授を任ぜられた先生が、軍陣歯科、歯科歴史の 2 講座を創設担当したことにはじまっている。また、陸軍歯科医または歯科医軍医を中原実先生は「軍歯」の名称で呼ばれていた。

「大正 14 年 10 月編、日本歯科大学専門学校一覧」によると本校歯科大学士、ドクトル・オブ・デンタルメディシン中原 実、軍陣歯科学、歯科医学史とあり、「昭和 15 年 7 月刊行の日本歯科大学専門学校一覧」にはドクトル・メヂチーネ・デンタリエ、本学歯科大学士中原 実、歯科史、軍陣歯科学と明記されている。

なお、本一覧の 91～92 ページには「標本室細則」がありその中に「歯科史」の項目がある。この項の記載より、この標本室はわが国に於ける最初の歯学史資料室の開設であるといえ、今回の新潟歯学部における「医の博物館」の開設と共に、日本歯科大学が歯科医学史に果たした大きな貢献の一つと言える。